

鄭也夫の《礼語・呪詞・官腔・黒話》

谷 峰 夫*

《Greetings · Curse · Bureaucratic Tone · Secret Language》 by Zheng Yefu

Mineo Tani*

《Greetings · Curse · Bureaucratic tone · Secret language》 (Zheng Yefu, 1993—Guangming Ribao Publishing Company) enlightens us on a lot of sociolinguistic points. The study of 23 Chinese expressions is full of interesting suggestions for considering the social context of China behind them. The aim of this paper is to outline the essential features of each example and introduce the author's excellent results.

Key Words (キーワード)

Zheng Yefu (鄭也夫), Greetings (礼語), Curse (呪詞), Bureaucratic tone (官腔), Secret language (黒話)

〔1〕 “喫了嗎？”

中国語の挨拶言葉の中で使用頻度が恐らく最も高いであろう“喫了嗎？”は挨拶言葉としては洗練されていない随分鄙俗な表現になっていて他民族に類例を見ないのであるが、礼節の国の民が何故このような言い方をするのかについては中国の長い歴史の中で発生した天災（ときとして人災をも）を考慮に入れなければならない。つまり、飢饉が頻繁に民を襲い、餓死や人相食む状況が一過性のものではなかったという背景があるのであり、しかもこのことは古代のみならず近現代の中国にあっても無縁ではないという点を視野に置く必要がある。こういう死活に係わる場所から生まれた“喫了嗎？”という挨拶言葉には従って自ずと同情の念が含まれるわけで、共に苦境にあっても手を差し伸べ助け合おうとする気持ちが込められ、相手の生存への心配りを感じさせるものとなる。尤も長年に亘り使っている過程で潜在的に意味するところのものが薄れるということはあるが、そ

れにより本来具有するこの種の情までもが消失するというわけではない。

ところでこの“喫了嗎？”は今日挨拶言葉として衰微の趨勢にあるようだが、これは居住環境の変化と関連性がありそうだ。伝統的な中国社会というのは変化に乏しい静態社会であり、そこでは気心の知れた顔馴染みへの挨拶として“喫了嗎？”は正に打って付けであるわけだが、静態社会が崩れ、人の流動が激しさを加えるようになると見ず知らずの人が増えることになり、彼等に対する挨拶としては妥当なものではなくなってしまふからである。“喫了嗎？”が昔ながらの四合院や変化の少ない農村を除き勢力を失いつつあるのは上記の理由による。

最後に一つ。苛酷な天災に度々見舞われてきた中国人から“民以食為天”（民は食を以て天と為す）という言葉が生まれているが、これに象徴される如く中国人は食に対して飽くなき追求を行ってきたし、食の為には労力を注ぎ込むことを惜し

*海上保安大学校 (Maritime Safety Academy)
呉大学非常勤講師

まなかった。また、飢餓のあとではそれを埋め合わせるかのように決まって飲み食いの風潮が盛んになるということも中国人の食に対する姿勢を考える時に軽視できない点であり、“喫了嗎？”をこういった枠組みの中で理解することも必要である。

〔2〕“好天気”

Walton Hamilton は“好天気”という挨拶言葉を農業文明の名残だと考えている。天気・天候に大きく左右される農業は大変な苦勞が付き物だが、その農業をやってゆく上で気象を含む諸々の条件が農民に好都合に作用した場合や好条件が揃うことを切に願う場合における集約化された表現だと言う。従ってこの言葉には必ずと豊作への強い願望が内包されており、収穫時の祝福の意も込められていることになる。

ところで同じ Hamilton の推測であるが、これがもし農業社会ではなく都市の商業社会ということであれば事情は違ったものになり、商業社会の最大関心事が物価であることからすれば“好價錢”が“好天気”に取って代わるのではないかと言うけれども言葉の審美的追求という点からこれはあり得ないことだろう。都市型社会における富の蓄積や余暇の増大は自然と人をして上品さや優雅さに向かわせ、それが言語にも反映されて品位の低い卑俗な表現を避けるようになるであろうからである。

〔3〕“誰？我！”

戸で隔てられた場合や電話などで“誰？”と聞かれて“我！”と返事をするには流動性を欠いた閉鎖社会の特徴が端的に示されている。親族や馴染みを核として形成される狭くて小さな生活圏では姓名を告げる必要はなく、一つの単音節語である“我”だけで十分事足りるのである。親近感があり、情報伝達における話し手の省力化という目的も同時に満たすことができ、最良の選択による返事ということになる。ただ、この“我”というのは代名詞であり、没個性の最たるものであ

ること、また姓名を伏せる点は伝統社会における“人怕出名，猪怕壮”の価値観と一致することは注目しておいてよい。ともあれ、高度な閉鎖社会にあつてはその構成者の知名度はほぼ等しく、“你”と“我”の間柄が極自然に形成されて姓名を言う必要性がなくなってしまうのである。

だが、これが流動性の高い開放社会となるとそうはいかない。開放社会では個性が重視され、自由競争が前提となるので自分から姓名を告げ、更には名刺を渡して知名度を勝ち取るための努力をする。つまり、活動の枠が拡がり、交際が頻繁となる社会にあつてはそれ迄の“我”が姓名に場を譲るわけで、姓名は常に人の口に上ることになる。呼称としての姓名は堅苦しさや余所余所しさを伴いはするが、“我”より遥かに個性的色彩が強いので開放社会にそれだけ馴染むのである。

〔4〕兄弟伯叔

中国語は親族呼称に対する拘泥りが強い言語である。幾つか例を挙げる。

(一) 英語では普通長幼の別をつけずに単に brother というだけだが (elder brother, younger brother という区別は特別な場合に限る)、中国語では“哥哥”か“弟弟”かを必ずはっきりさせる。

(二) 古漢語に見える兄弟の長幼の順を示す“伯仲叔季”や日常の呼称で用いられる“大哥，二哥，三弟，四弟”について言えば、英語でこれらに対応する一定の語というのは無い。

(三) 英語の uncle, 仏語の oncle に相当する語として中国語には“伯父，叔叔，舅舅，姑父，姨父”があるし、英語の aunt, 仏語の tante に相当する語としては“伯母，叔母（嬢子），姑姑，姨，舅母”があるという具合に中国語での多様性をここに見ることができる。

(四) “表親”に至っては“表叔，表舅，表哥，表弟，表嫂”などと大きな広がりを示すが、外国の言語でこれらをカバーし得るものは見出し難い。

(五) “妯娌，連襟，一担挑”といった親族間

同士の呼称も体系化されている。

このように見てくると、中国語の親族呼称は一見複雑極まりないようだが、これは簡便さ追求の帰結に他ならない。例えば、英語での grandfather, great grandfather, great great grandfather が中国語にあつてはそれぞれ“祖父、曾祖、高祖”となるが如きを見れば明らかである。

ところで中国語における親族呼称には、

(1) 父方の親族か母方の親族かを区別する。

例えば、“叔”と“舅”，“姑”と“姨”。

(2) 直系親族及び父方の男性親族に長幼の区別をつける。例えば，“兄”と“弟”，“姐”と“妹”，“伯”と“叔”。

という二つの大きな特徴がある。漢民族は度重なる戦乱を経験し、弱肉強食の世を生き抜くために族の結束を強化してきたが、そこでは血縁を基礎とした人倫の秩序が極めて重要視され、それが親族呼称の特徴に反映される結果となっている。親族を九世代で捉える“九族”や服喪形式であるところの“五服”も親族呼称と背景を共有するわけで、族の結束の強さが大きな意味をもったことは十分に把握されねばならない。

〔5〕“哥兒們”

“哥兒們”という語は社会学で言う人格化道徳と特殊主義を基礎とする友人関係の中で用いられるが、血縁関係に基盤を置かないこの語に“哥”の字が冠せられ、兄・弟の間柄が形成されるのは何故なのか。それは中国人にとって親族の中に占める兄弟関係というのが極めて重要な意味をもち、友人を兄弟に準えることで普通の友人以上の関係を構築でき、双方の心情的距離をぐっと縮める作用が期待できるからである。これは一族の中で育った者がそこでの仕来たりや規律を社会に持ち込もうとする行為であり、その結果家父長制的価値観を具現した“哥兒們義氣”が関係を律するに大きな役割を演じることになる。

義兄弟の契りを結ぶということは昔からあり、《三国演義》《水滸伝》《西遊記》等の古典小説にも見ることができる。ただ、昔のそれは天下を

奪ったり、朝廷に反目したり、覇を唱えるといったことに目的があったが、現代は価値観としては昔と同一のものを宿しながらも目的はそういうところにあるのではなく、その意味でかなり変質したものになっている。

伝統的な中国社会には社会生活を支配する主要な力として皇帝の権力や一族の勢力と並ぶ“哥兒們”の関係によってつくられた結社の力があつた。だが、1949年の革命の成功は統一された政権と現代的な管理手法の結合で以て統治を社会の末端にまで及ばせ、このことが“哥兒們”の関係の形成を難しくさせてしまった。ただ、これは長くは続かない。文革の終焉でイデオロギーが瓦解し、人々が同志の関係を信じなくなってお互いを利する友人のネットワークづくりを始めるや人間関係は又もや多元化し、コネが蔓延り、ここに“哥兒們”の関係も復活をみるようになる。その結果今日では“哥兒們”という語が未曾有の頻度で用いられるようになっており、“鉄哥兒們”とか“掰了”といった関連俗語までが社会の主流言語の中に入り込んでいるといった状態である。

〔6〕“先生” — “同志” — “師傅”

(一) 開放前の中国は階層がはっきりと分かれた貴賤の別のある社会であり、敬語の使用は盛んであつた。例えば、公共の生活の場にあつてはサービスに当たる側がそれを受ける側を敬語で以て呼ぶのが一般的で、“先生”（女性には“太太”，“小姐”）という語はその代表格であつた。この場合、サービスを受ける側に“先生”たる資格があるかどうか拘らず“先生”という語が用いられたが、これは宋・明の時代に“客官”という呼び方が流行したのと酷似した現象である。

(二) 次に解放後についてであるが、革命家というのは新しい言語で新しい社会の雰囲気づくりをしようとするものであり、そこに登場したのが、“同志”という語であつた。これは1949年から1969年にかけて公共の場での唯一の呼び名となる。それ以前の“先生、老爺、太太、小姐、少爺”といった呼び方に対する極度の憎悪感“同志”と

いう語を社会に浸透させるに効果的な役割を担った。この“同志”の本来の意は“志同道合”であり、革命家の間で用いられていたのが革命の成功後一般化されたわけで、新鮮さとともにその平等感が最初人々の心を深く捉えた。だが、時が経つにつれ単調な響き、ぎこちなさ、素っ気無さが意識され出し、特別な場合に尊敬の気持ちを表したくともそれが出来ないもどかしさが実感されるようになった。そこで一時“長”で以て“同志”に代えるということが行われたが、尊敬の意を表すには至らず、“同志您”のような苦し紛れの工夫が凝らされたりもした。そこへ起こったのが文革であるが、この動乱は“同志”という呼称をいよいよ冷酷で唾棄すべきものに変え、“嘿”と呼ぶのと殆ど違いがないぐらいにまで下落させてしまったのである。

(三) 上の情況を受けて60年代末から“師傅”という語が使われ始め、ここに“同志”の一人天下は終わりを告げることになる。“師傅”とは“教導、伝授本領的人”の意であり、“同志”より敬意が込められており、言葉の美も併せ持っていて人々の要求を満足させるに十分で、これに加え労働者階級が一切を指導するという時代哲学に合致したため呼び名として急速に普及したのである。当初は“同志”と平行して用いられていたが、短期間で見る見る追い越し、現在では圧倒的な優勢を誇っている。

〔7〕 学術著作の中の“先生”

“先生”という語は尊称として用いられる以前は“老師”の意であったが、この“老師”を意味する“先生”がここ十年来学者・教師の間で復活し、口語においてのみならず、学術著作の中でも頻繁に使用されているという状況がある。凡その傾向は以下の通り。

(一) 老学者は“先生”と呼ばれる。

(二) 少壮の学者は大抵“先生”と呼ばれることはなく、姓名だけで呼ぶのが一般的である。

(三) 外国の老学者の多くは“先生”と呼ばれないが、外国籍華僑の学者や外国籍の中国学学者

は別格で、その大部分は“先生”と呼ばれる。

(四) 亡くなって久しい学者の場合（例えば清代以前）は“先生”が付かない。

(五) 生存しているか若しくは亡くなってそれほど経っていない漢語の先輩学者に対しては“先生”を付けて呼ぶ。

このように上記(一)～(五)は中国の一つの現実なのであるが、それでは外国の学術著作はと見てみると、外国の学者というのは序言や謝辞の中では教えを受けた学者を“先生”で呼ぶことはあっても本文においては相手が如何に高名であろうとも姓名だけで済ませるのが一般的で、ここに中国の場合と大いに異なる実際が見出だされる。

どうやら中国の学者は真理の追求の場でも世俗の繁文縟礼に拘泥している感があるが、真理の前では生者と死者、中国人と外国人、年少者と年長者のそれぞれで何ら差異はないはずであり、真理を前にした場合の“先生”は不必要なものとして捨て去るべきであろう。

〔8〕 “老×”と“小×”

尊重の念を以て人を呼ぶ時の“老×”とこれに対する“小×”とを比べてみた場合、中国社会のもつ一つの特徴が浮かび上がってくる。長期的視野で捉えた中国は変化の緩慢な静態社会であったが、そこでは経験に重きが置かれ、伝統が大きな意味をもち、創造的刷新的なことは疎んじられる傾向にあった。先祖によって子孫が律せられ、先祖の経験によって子孫の生活が枠を嵌められるのであり、勢い年輩者に威信が集まって社会の指導的地位が形成されるという構造になっていた。“老×”“小×”が呼び方として成立した背景がここにある。

だが、十九世紀中葉後は中国社会に大きな変化が生じ、歴史の舞台に登場したのはそれ迄になかった新しいタイプの人物であって経験に頼る年輩者ではなかった。そしてこの種の人々によって1949年の革命は成し遂げられるわけであるが、こうした中“老×”“小×”という呼称も変動する社会への対応を余儀なくされることになる。

ところで、新中国成立後の指導層に見られる以下の如き顕著な現象は“老×”なる呼称が社会的にマイナスの方向へ作用したものととして注目に値するであろう。顕著な現象とは、

(一) 指導的ポストの長期に亘る独占が指導者の晩年まで続いたこと。

(二) 政治の世界でのパターンが他のあらゆる領域に浸透し、指導者の居座り状態が見られたこと。

(三) 建国後三十年近く鎖国さながらであったことと硬直化した一元的世界が社会の変遷を拒んできたことの背後にはそうならしめる指導層の体質があったこと。

(四) 改革開放後、それ迄長期間失意にあった老人が各分野で権力・地位を占有し、新旧の正常な交替を阻み続けていること。

である。こういった現象は“老×”という呼称に安住し、その呼称を逆手にとった傲慢さの成せるわざであり、“小×”と呼称される者の力量を不当に過小評価していることの結果であると言えるのではないだろうか。

〔9〕“×老”

中国語は弱年者に対しては“小×”という呼称をもつのみであるが、一方年長者に対しては“老×”のほか“×老”が呼称として用いられることがあり、中国文化が年輩者向けであることを示す一端が窺える。“×老”は“老×”の上をゆく敬語であり、一定の社会的地位をもつ声望が高い人を対象とするものであるが、権勢に媚び諂い、利の分け前に与ろうとする連中からは御世辞で使われるという側面ももっている。“偉大”“天才”“孔武”“俊美”といった語は用い方次第で諂いの機能が担えるが、敬語や尊称となるとその傾向が一層顕著に出るものである。

新中国成立後共産党政権は尊卑の別を示す呼称の消滅に最大限の努力を払い、平等の名の下に“同志”という呼称を押し広めたのだが、“×老”はその中をずっと生き延びてきたわけである。これは平等の追求が徹底しなかったことを物語るも

のであり、諂いの土壌の上で不平等が存在し続けたことを意味すると言えよう。

〔10〕“愛人”と“気管炎”

中国語には妻を指す語が多い。例えば、

妻・妻子・夫人・太太・老婆

婆娘・内人・孩子他媽・屋裏頭的

などがそうであるが、1949年の革命でその大半は女性軽視の色彩を帯びるものとして新社会から不適格の烙印を押された。そしてこれらに替わって登場したのが“愛人”という語である。この“愛”の字を冠した語が他に取って代わったのには五四運動以来の反伝統のシンボルである自由恋愛が社会で広く受け入れられてきたことと大いに関係がある。中国の礼教では夫婦間の“愛”ということに憚って言わなかったが、その“愛”を前面に押し出した“愛人”を呼称として公然と用い始めたのは革命幹部であり、急速に人民の間で普及していったわけである。

ところでこの“愛人”という語は夫から妻へ、妻から夫へというように双方向で用いることが出来、夫と妻は相互に“愛人”で呼び合うことにより対等で平等な意識を有し、このことが男女平等に大きな役割を果たした点は否定できない。

だが、この男女平等は呼称を改めることだけに止まらず、妻を夫同様社会の労働者にし、妻の経済的地位を夫と同等にしてこそ達せられるべきものとされ、女性を真に解放して初めてそれが可能だと考えられた。では、四十数年を経た現在、その実践の結果はと言うとそれがうまく行っていないのが現実である。社会の公的な場では男尊女卑が依然として根強い一方で、家庭内にあっては嚙天下が勢いを振るうという何ともアンバランスな様相が世を覆っているのである。共稼ぎ夫婦がほぼ同一の給料を得る現状下では相対的に男性が廃れ、女性が栄える傾向にあるらしく、それが先ず家庭で起こっていると見るのが妥当なようだ。“愛人”という語が無性別なもので男女の同化をもたらずに大なる作用があったことも遠因であるかも知れず、そうだとすれば大変皮肉な結果であ

ると言わざるを得ない。

〔11〕 “長” の字で溢れる社会

中国の伝統社会では権勢・富・名誉を得る一番の近道は役人になることであり、ここに典型的な役人本位の世の中が形成された。そこでは官職が身分として相当の重みをもち、社会に絶大な影響を与え、官職に対する民衆の敬慕の念と従順の心情には並々ならぬものがあった。それは同時に役人の驕りを助長し、民草の如才無き振る舞いを招くことにも繋がるのであるが、ともあれ官中心に社会が回中、官職を呼称として用いる伝統が出来上がったことは一つの特徴として大いに注目してよいであろう。

巡撫大人・道台大人

知府大人・知県大人

などは官職を呼称に使ったその代表例である。また、“三閩大夫”“太史公”と言えればそれぞれ屈原、司馬遷を指し、“丞相祠堂何処尋”の“丞相”は諸葛孔明を指すといった例は、文学や科学など他の方面で功績を残しても官職で以て呼び習わすという官優先の根強さを示すものとして興味深い。更には、官職とは無縁の一般人に対しても“官”の字を配した“官人”“客官”“看官”等と呼んだ例に至っては官中心社会への便乗であり、官職を呼称とすることへの拡大解釈としてこれまた面白い現象である。

以上は伝統社会でのことだが、それでは現代にあってはどうかであろうか。新中国成立直後の五十年代には職務名を呼称として使用しないようにとの呼び掛けがなされているが、それから数十年というもの“長”の付く職務名を呼称にしているケースは増えこそすれ減ることがないというのが現実である。社会には“部長”“局長”“処長”“廠長”“校長”“所長”を始めとして“長”の付くものが氾濫し、殆ど最高級の敬語の如き観がある。しかも、呼称としての用いられ方は何も公的な場だけに限ったことではなく、私的な場であっても盛んであり、公私のけじめというものがない。このことは中国が依然役人的体質の社会であるこ

とを物語っており、その点では伝統社会と何ら変わることはないということになる。アメリカのように社会を動かす複数の勢力が相互に作用し合い、均衡を保っている国とは違い、中国の場合は官の一元化指導の性格が非常に強く、このことが上記の事情に大きく反映していると言えるのではないだろうか。

〔12〕 “爺” の変遷

“爺”は古くから話し言葉として用いられてきた歴史の長い語である。最初は古楽府《木蘭詩》にも見えるように“父親”を意味したのだが、その後には多くの場合“祖父”の意で使用されてきている。そしてこれに加え派生した意があるのだが、清代の趙翼の考証では唐代の頃から“爺”に尊称としての派生義が現れ、次第にその尊称の対象範囲が広がっていったと言う。先ず、

王爺・老爺・少爺・駙馬爺

のように地位のある男性に対して“爺”が付き、次いでその対象は、

仏爺・龍王爺・土地爺

財神爺・竈王爺

の如く宗教や神話の世界にまで及んだ。また、市井にあって見知らぬ男性を尊称する“爺們兒”、農村で大勢の人を前に呼び掛ける“老少爺們兒”、恐れを知らぬ男性に対する“魯爺們兒”、下層社会の男性同士の衝突で相手より一段上だと思わせるために発する“大爺”等々“爺”の派生義としての発展は止まるところを知らなかった。

だが、1949年の革命で“爺”は大きな転機を迎える。先ず、人間平等の価値観が“老爺”“王爺”“少爺”といった語を追放したし、続いて無神論による迷信打破が“龍王爺”“財神爺”“土地爺”“竈王爺”等の語を駆逐した。更には“大爺”の存在基盤も根底から崩れ去った。社会主義建設のために各人が螺子釘の役割を果たすよう求められた中で、個人的な英雄主義が蔓延り社会に無数の“大爺”を自任する者が存在することは許されなかったからである。斯くして“爺”の付いた夥しい語が消え失せ、年輩者が口にする“爺們兒”――

この使い方も実際は形骸化しているが——を残して殆ど“爺”の無い社会が到来したわけである。

ところが、時代が移り七十年代末になるとこの“爺”が復活の兆しを見せ始める。そして今社会で最も幅を利かせているものに“倒爺”と“侃爺”の二つの語がある。この二つはともに社会の風潮と“爺”とが結び付いたものであるが、“爺”に有能の意をもたせている点がそれ迄と違っている。また、前者の“倒爺”については政府当局が用いる“投機倒把者”という言い方を大衆が拒んだ結果として出来たものであり、この点も“爺”の変遷を考える上で見落とすことはできない。

〔13〕 “棒”

近代人には古代人のようにあからさまに性を崇拜するということは避け、意識的にそれを覆い隠したり、変形・弱化・曖昧さを通して表現しようとしてきた傾向が見られる。そのために一見して性とは無関係だと思える語であってしかも良い意味を表すものの中に性的な痕跡が見え隠れしている場合があるものだ。“棒”という語について言えば、これに“好”の意があるのは石鵬飛によると恐らく生殖崇拜の名残であろうということになる。同氏の述べていることを掻い摘めば、“棒”とは男根を意味する“棍”のことであり(妻のいない男を俗に“光棍”と言うが、この“棍”は男根の意)、“棒”が逞しければ逞しいほど男性としての重みと価値が増し、そのことは生殖崇拜の中で自ずと“好”に繋がるというのである。そして、小説《林海雪原》に登場する匪賊の頭目を例に挙げ、彼の渾名である“許大馬棒”は男根と関係があるのかも知れないと推測する。同氏の説は啓発性を有するものの仮説の域を出ず、更なる論証が待たれるが、唯一つ付け加えるとすれば、《林海雪原》の背景である東北地方には私娼とか阿婆擦れを指す“馬子”という俗語があって、男性が乗るに任せるを由来とするそうだが、このことから推理すれば、“許大馬棒”の“棒”が男根を意味しても別段不思議ではないということである。ともあれ、“好”の意味での“棒”を性的な痕跡

が見え隠れしている一つの例として取り扱うことに今のところ有力な否定的証拠は見付かっていない。

〔14〕 “他媽的”

罵り言葉というのは感情がストレートに出るだけにその民族の性情を知るバロメーターとなり得る。中国の場合罵り言葉の代表格と言えば“他媽的”を挙げることができるが、この語は家柄のランク付けが最も盛んであった魏晋の頃に起源を有するもので、世界の最も俗な罵り言葉の多くがそうであるように性と深く関係している。ただ、“他媽的”に限らず中国の罵り言葉で性に密接に係わるものはその対象を本人自身よりも本人の親族に向けるという傾向がはっきりしていることが大きな特徴である。近くは本人の母や姉妹から遠くは何代も前の祖先迄罵りの対象は実に広範囲に及んでいるのである。その理由は次の二つの面から考える必要があろう。

(一) 中国の伝統社会は家庭や家族本位のものであり、家庭や家族から切り離れたところでの個人というのは何の意味ももたないわけである。そして、この血縁の集合体は祖先崇拜を精神的支柱としており、こうしたことからある人間に恨みを抱くことはその家族・祖先に対して恨みを抱くことと同義になり、ある人間への罵りはその家族・祖先への罵りという形をとることになるわけである。

(二) 二義的な理由として感情移入ということを考えなければならない。これは相手の急所をずばり突き、鬱憤を晴らすに最も効果のある象徴体へ自己の感情を思い切り投げ付けるということである。直接本人個人を罵るよりも親族(とりわけ女性の親族)や祖先を象徴体としてそれを罵倒する方が多くの連想を伴った深い意味を込めることが出来、最大の効果が得られるというのである。

〔15〕 “撐的”

“撐的!”(または“喫飽了撐的!”), “没事撐的!”は中国の北方(とりわけ北京)でよく

耳にする言葉であり、常軌を逸した行為に対して加えられる非難の意をもつ。この言葉の背景には飽食と飢餓という対立する構図があり、人間の行為を腹の満たされ具合で判断しようとする長年の経験則が存在する。中国の社会というのは十分に食べられないのが常態であったわけで、偶々胃袋が一杯になることはあってもそれは一時的にして長期間続くものではなかった。そうした中、時偶満足な食事が取れた場合の中国人は一般的にその生活態度が‘今日の酒は今日中に飲んで酔ってしまう’式のもので、‘泰平にあつて乱を忘れず’式になることはなかった。彼等は意識の上ではこのような幸せが再びやっては来ないであろうこと、盛んな時代は短く、何時迄も天は自分に恵みを与えてはくれないだろうことを十分に感じていたが、だからと言って後日の為に万全の備えをするかと思いきや、そうではなく刹那的な享樂へと走ったわけであり、その結果が尋常ならぬ振る舞いへと繋がることなる。

人間は腹が満たされなければ余計な力を使うまいとするものである。その場合行動様式としては社会の慣習・仕来りに大人しく従い、それを逸脱するようなことはしない。逆に飽食により精力を持って余している人間というのは多くのエネルギーを枠に囚われないうところへ注ぎ込み、奇異な感じを与える行動に出易い。中国には“飽暖生淫欲”という名言があるが、これの意味するところのものに通じると言つてよい。“搆的！”に代表される語にはこういった人間の行為・行動に関する判断の基準が働いており、興味を引く言語現象の一つに数え上げることが出来よう。

〔16〕“新鮮”

“新鮮”が没這事／没這道理／胡来の意で用いられることがある。また、これと同義の語に“新新”がある。“新鮮”と言ひ，“新新”と言ひ，何れも北方人（特に北京人）の間でよく使用されているのだが、この二つの語には伝統社会の論理が深く染み付いている点に注目する必要がある。

中国の伝統社会は変化の緩慢な静態社会で同質

性を貴ぶが故に同一方式・同一行動を絶対視し、滅多に目にする事のない珍しい事象や他と違った行為は同質性を打ち壊すものとして必ず非難的となった。見聞が非常に狭く、矢鱈と物珍しがることがマイナス方向に作用してその受け入れを固く拒否してしまうわけである。そこには“槍打出頭鳥”や“出頭の椽子先爛”といった諺に通じるものがあり、すべてを一元的に律しようとする社会の力を読み取ることができる。これに対し近代社会はと言うと変化が目紛しく、新しいことへの挑戦が絶え間なく、異質なものを取り込むことに積極的な多元的社会であるから伝統社会の論理は通用しなくなる。見聞の広さは多少のことで驚き珍しがらるる感覚を誘発せず、珍奇な事象に遭遇しても非難や排除には至らずプラス方向で抱えてしまおうとするために“新鮮”“新新”といった古い社会のロジックを反映した語は用を為さなくなるといふものである。

〔17〕“革命”

この百年来“革命”という語は頻繁に用いられ、辛亥革命・北伐・国共内戦を経験する中で革命は神聖化されてきた。そして最も革命的な力が流血を伴う凄まじい闘争を経て政權獲得に成功したことで革命を神聖視する風潮は一挙に高まった。

ところで、革命によって政權を掌握した者は革命という語のもつ計り知れない魅力と魔力を知り尽くしており、自らの行動—それが創造的なものであれ、保守的なものであれ—に革命という名の装いを凝らそうとする傾向がある。ここに“革命”という語は変質し、元来の特殊な意から外れて“好”の意に摩り替えられるという現象が生じる。そして概念の摩り替わった語は何度も使用されているうちに本来的な意に回帰することなく堂々と一人歩きを続けるのである。古いものを捨て去り新しいものを打ち立てるはずの革命が保守主義の正統化のために利用され、現状の守護神の役目を担うことも可能になるわけである。その結果、最も現状に安んじている者が最も革命的だと言われることも起こり得る。文革後期には革命

派を自称する者が“形勢大好”を盛んに口にしながら、この現状を肯定し擁護する保守性こそが革命だとされ、その逆の現実を批判し変革を企てることは反革命の烙印を押されたという例は革命が現状の守護神となった格好のケースだと言えよう。

なお、“革命”という語が役人口調を帯びて用いられた場合、多くそれは党の言うことを聞くと同義になり、党の従順な道具と化するの意になることを補足しておきたい。また“革命”の名を掲げて人を欺いたり、陥れたりするに至っては革命そのものが本質を隠すための仮面として悪用されていることになり、愈々本来の姿とは相容れぬものとなることも付け加えておきたい。

〔18〕“紅”と“黒”

文革の十年はイデオロギー面が突出し、極端に走った時代であるが、それを象徴するかのようには世界は“紅”と“黒”の二色で截然と塗り分けられた。ここでの“紅”は革命を、“黒”はその逆の反革命をシンボル化したもので、それぞれを冠した言葉が実に多く出来ている。いまその一部を例として挙げると以下の如きである。

紅：紅衛兵，紅小兵，紅五類，紅袖章，
紅宝書，紅司令，紅色恐怖，紅色海洋
etc.

黒：黒幫，黒線，黒五類，黒干将，黒爪牙，
黒材料，黒修養，黒幫分子，黒幫子女
etc.

ところで、“紅”と言ひ“黒”と言ひ、中国の伝統社会にあつて、ともに如何なる象徴的意味をもつものではなかったのが何故象徴性を有するようになったかについてはロシア革命が中国に与えた極めて大きなインパクトを考慮に入れる必要がある。李大釗の書いた文や陳原の述べているところからすれば、ロシアで勃発した革命が中国に計り知れない影響を及ぼし、ロシアで象徴化されたものが中国に借用された可能性の大変高いことが窺える。そして、そうした土壌の上で象徴性が文革期にピークを迎えるわけである。

〔19〕“砸爛狗頭”

文革を社会言語学的に見た場合幾つの特徴が浮かび上がるが、それを記すと以下ようになる。

(一) 罵語の氾濫：“混蛋”“放屁”“他媽的”“一小撮”“狗崽子”“牛鬼蛇神”“砸爛狗頭”等の罵語の使用が文革時に極点に達するが、ここで重要なのはこれら罵語の使用が文革が普遍化、合法化したということである。人格を汚し、人の尊厳を踏み躪り、人身を迫害し、人権を剥奪すること、これが文革の基調を為しており、階級闘争を掲げて敵を罵り、呪い、鞭打つことを日常茶飯としていた中では当然の現象であろう。

(二) 極端の意を示す言葉の多用：“大”“最”“極”“十分”“非常”“無限”“徹底”“完全”“全面”“空前”等の語の使用頻度が文革時にあつてはその前後と比べ断然高くなっているという特徴がある。また平常時での漢語と英語を比較してみた場合、英語では相対主義でものを判断する傾向が強いのに対し、漢語では絶対主義による判断が顕著である。この漢語のもつ絶対主義的傾向に拍車を掛けたのが他ならぬ文革であるわけだが、これは盲目的自信の現れであり、懐疑を排除しようとする非科学・非理性の所産だと言えよう。

(三) スローガンの洪水：文革時の大量の文章はスローガンで溢れていたが、スローガンというのは思惟の過程を省略し、最終的に訴えたい部分を簡潔化して人々の情緒に入り込もうとするわけで刺激が強いと確かに有効ではある。だが、使い古されると色褪せて空疎な感を免れなくなるという宿命も持っている。そしてこの空疎な感で文革は覆われ、非生産的な行為が繰り返されることになる。

(四) “語録”の威力：文革時は毛沢東の語録、紅宝書がバイブルであり、一切を律する力を有していた。“語録体”の一言は一万言の重みをもち、毛沢東一人の思惟が全人民を貫き、他の思惟が入り込む余地を与えなかった。

(五) 称賛体の全盛：“偉大”“光荣”“戰無不勝”といった短いものから“千万張笑臉迎着紅太陽，千万顆紅心飛向您身邊”“天大地大不如您

的恩情大，河深海深没有您的恩情深”のような長いものまで数知れぬ称賛の言語が噴出し、文革中の文章に欠かせぬものとなった。だが、これらは空虚な響きを与え、内容の貧しさを露呈するだけのものではしかなかった。

[20] “劳逸結合”

言葉巧みに偽って過失や真相を覆い隠すことを漢語で“文過飾非”と言うが、中国ではこれが一つの言語現象として古くからの伝統になっている。尊い人や肉親の権威を守るために良からぬことがあっても憚って率直に言おうとせず、美しく言葉を飾り立てて人の目を実際から逸らせようとするわけである。古いところからは《漢書・賈誼伝》の例を挙げ、かなり近くでは洪承疇、曾国藩、陳炯明という三人の場合を具体的に取り上げているが、この悪しき伝統は解放後にあっても脈々と受け継がれている。その中で最も忘れ難いのが六十年代初期の“劳逸結合”というスローガンである。この時期は人災と天災の両方に見舞われ、経済は深刻な打撃を受け、正常に仕事が出来ず食べ物に有り付けぬ人が続出する悲惨さに直面した。こういう困難な状況下に登場したのが労働と休息の統合を呼び掛ける“劳逸結合”のスローガンなのである。これは惨状から目を覆い、権力者への不満や批判を躲し、権威を守るために、現実味に欠ける美しい言葉による装飾でその場を切り抜けようとしたに過ぎない。このスローガンが出される少し前の“富日子当窮日子過”という言葉とともに当時の“文過飾非”の典型例に数えられると言ってよいであろう。

[21] 隠語

中国の伝統社会は構造的に“隠語”（“黒話”“暗語”“切口”“口白”“春点”などとも呼ばれる）の蔓延る土壤が時代による差はあれ割と広く存在していた。それに比して1949年の革命から約30年間の中国社会というのは世界の現代史上稀な清い社会であり、秘密結社や任侠団体が姿を消し、隠語の存在基盤が殆ど一掃されてしまった。僅か

に見られたのが青少年不良グループのそれであったと言えるまでに隠語は極度に衰退してしまうのである。しかし、80年代に入ると改革開放の影響下で隠語がまたぞろ復活し始める。そこから生まれたものは頗る多いが、その一部を例として挙げると以下の如きである（それぞれの隠語とそれに相当する括弧内の一般表現で示す）。

抬（掲発検挙）

帽花（警察）

喫奶（偷公家東西）

折了（抓起来進局子）

玫瑰花（刮刀留下的傷痕）

ところで、隠語というものをいま社会学的に見た場合、次のことが指摘できるであろう。

(一) 社会と敵対し、政府当局が容認しない特殊団体にとって隠語は一つの自衛手段である。

(二) 隠語にはその団体の一体感と身内意識を高める作用がある。それは構成員に自分はアマではなくプロだという自覚を持たせ、一種のプライドを植え付けることにもなる。

(三) 80年代、90年代の中国は多元的社会であり、一元的社会であった50年代、60年代と比べ地下活動が盛んで、隠語もそれに比例して増加している。多元的社会では“道高一尺，魔高一丈”の諺通り法の網の目を潜って活動する輩が増え隠語の蔓延る下地が出来ることが、これは社会の活力との引き換えという性格をもつものである。

(四) 隠語は知らず知らずのうちに篩いに掛けられ、その一部が社会の主流言語の中に受け入れられてゆく。例えば、

上当，掌盤，敲竹槓，風声緊

などは元来やくざ社会の言葉であったのが今では一般の常用語になっているが如きである。今日の社会では隠語が曾てないスピードで主流言語の中に多く入り込んできているが、その原因として次の二点が考えられよう。

(1) マスコミがその触角を社会の底辺にまで伸ばし、見聞したところを大衆に伝えて主流文化との間の距離を縮めているため。

(2) 一般の民衆からすれば長年使用された平板

で干涸びた言葉に嫌気がさし、隠語を真似ることで新鮮さを味わいたいと考えるため、これは反正統的な価値観が社会に台頭して来ていることをも意味し、文化の刷新、再構築が望まれていることの証しとも言える。

〔22〕 流行り謡

流行り謡（中国語で“民謡”）は民衆の心情の発露として中国で長い伝統を有するものだが、そのテーマは大きく次の二つに分けることができる。

（一）男女の恋愛

（二）社会に対する不満や抑圧する者への反抗

ここでは後者に焦点を絞ることとするが、この“政治民謡”とも呼ぶべき後者のタイプには統治者の側からの歴史ではなく、民衆の側からの歴史が見て取れるという意味で貴重なものが多い。ところで、古代と近・現代とでは“政治民謡”と言っても趣に違いがあり、それを以下で取り上げたい。

先ず古代においては、

(1) その時の為政者に反抗の矛先が向けられ、反乱や王朝の交替を流行り謡で以て民衆に促すという導火線の役割を果たす場合。

(2) 愚昧な悪徳官吏を皮肉り、嘲笑し、その腐敗振りを攻撃し、社会の不平等・不公平を嘆き、不満をぶつけることで精神的な鬱積を発散させようとする場合。

——の二つがあった。これに対し、近・現代の“政治民謡”になると上記(1)が完全になくなるというのが大きな特徴で、(2)の機能だけが受け継がれて今に至っている。

では、解放後における新社会での流行り謡に関して次の4点を指摘しておきたい。

(a) 政府転覆の企てではなく、単に社会に対して不満を漏らすだけであり、改善を期待してはいない。精神のカタルシスが得られればそれでよしとするわけで、流行り謡は安全弁の機能を果たしている。

(b) 流行り謡には民意・民心が反映されているので支配者はそこに見られる民衆の不満や社会の悪弊から目を背けず人心を掌握すること

が大きく求められる。

(c) 50年代、60年代の社会は80年代の社会と比較して流行り謡が少なかったが、だからと言って前者の社会が素晴らしかったというわけではない。社会の構成員を螺子釘にし、従順な道具としていた時代では疑いを挟むことは許されず、個性は埋没せざるを得なかった。勢い表現するということは押さえ付けられるわけで流行り謡の数の少なさに繋がることになる。それが改革開放に伴って水面下にあったものが一気に浮上する80年代へと移り、流行り謡は元の場合に戻り息を吹き返したということである。

(d) 人間は永久に満足を知らない動物である。社会が如何に進歩発展しても不満はなくなるものではない。一時的に満足を覚えてもより次元の高い満足を得ようと気持ちが向かい、これが果てしなく続くからである。この観点から流行り謡を見た場合、そこにある不満が低次元のものから高次元のものへと変化していることが認められるのなら社会はよくなっていると判断して差し支えないであろう。

〔23〕 外来語

中国語が外来語を受容する際の方式には基本的に大きく五つのタイプがあると考えられる。即ち、

(1) 純然たる音訳によるもの。

(例) 塔, 獅子

(2) 音と義を兼ね備えたもの。

(例) 引得, 基因

(3) 音に義を付加したもの。

(例) 丁恤衫, 法蘭絨

(4) 既存の名詞に“番/胡/洋/西”を冠したもの。

(例) 番茄, 胡琴, 洋槍, 西装

(5) 上記の何れのタイプでもなく、外来語を完全に漢語化してしまったもの。

(例) 青黴素, 拡声器

である。ここで(1)は最も純粋な外来語だと言えるが、数は極少ない。何故なら最初は(1)のタイ

ブであっても中国人に馴染まないなら(2)～(5)のタイプのもので考え出されて落ち着き先が変わるからである。また、(2)～(4)のタイプのものであってもいまひとつ中国人にぴったり来なければ(5)のタイプへ転化が図られるという傾向も見られる。

ところで上記五つとは別に漢語には更に日本から取り入れた特殊な外来語が存在する。中日両国は殆ど同時に西洋からの衝撃を受けながら外来文化の受け入れに巧みであった日本が大量の西洋の語彙を音訳・意識することに成功、それを中国が吸収するという経過を辿るわけである。このようにして中国が日本から借用した語彙は800以上に達し、同時期における西洋からの外来語を遥かに上回っていたのであるが、これらは由来からすれば生粋の外来語でありながら特徴からすれば完全

に中国のものだという二つの属性を併せ持っていることが指摘できる。

さて、以上から見た場合、外来語受容で中国人がとる姿勢は次の三つに要約できよう。つまり、

- (a) 自己(中国)を中心に置く。
- (b) 中国の土壤に外国のものを適用する。
- (c) “古い瓶に新しい酒を盛る”式である。

換言すれば、すべては中国化してのみ合法性をもち得るというわけである。漢民族は痕跡をなるべく残さぬように外来文化を吸収しようとするが、このことは外来語の受け入れについてもそのまま言えることである。痕跡を留める外来語がそうでないものより数量的に遥かに少ないことがそれを雄弁に物語っている。